2つを上下に記したもの）を用いることがある．

سېر sēr「セール（重量の単位）」

راځي rādzē「君が来る」

b) 音素 /əi/ の表記に ۍ が用いられる．

ډوډۍ ḍōḍəi「パン」，لکۍ lakəi「尻尾，尾」

c) 音素 /əy/ には ۍ，すなわち，ی に hamza を添加したものを用いる．

راځئ rādzəy「君（pl.）が来る」

d) ی は，/i/ または /ay/ の表記に用いる．/i/ の場合には ي，すなわち，ی に〈‥〉(dot 2つを横に書いたもの）を用いることがある．

راځي rādzi「彼が来る」

لرګی largay「棒切れ，薪」

سړي saṛi「人々」，سړی saṛay「人（pl.）」

7) پ の異体に，ټ，ڀ がある．

8) ړ の異体に，ڑ，ږ，ړ がある．

9) ګ の異体に，ګ，ڭ がある．

7, 8, 9 に関しては，Dorn (1847, p.388) を参照．

10) ペシャワール方言（パキスタンのパシュトー語標準語）の発音では，次のようになるが，正書法はアフガニスタンのそれと同じものを用いる．

څ [ts] > [s]　（څوک sōk「誰」）

ځ [dz] > [z]　（ورځ wraz「日」）

ږ [ǯ] > [g]　（زیړه gíra「ひげ」）

ښ [š] > [x]　（ښځه xáza「女」）

11) ا，د，ډ，ړ，ړ，ړ，ز，ژ，ږ，و の10個の文字は左接しない．

ډوډۍ ḍōḍəi「パン」，تالو tālú「口蓋」，ژر žar「速く」，غوا ɣwā「雌牛」，ږمونځ žmundz「禱」，وروړ wrōr「兄弟」，زړه zṛə「心臓，心」

12) 上記の文字体系で表記されるパシュトー語音素は，次の通りである．

a) 子　音

破裂音	p	b	t	d	ṭ	ḍ	k	g	q	’	
摩擦音	f	s	z	ž	š	ǯ	x	ɣ	h	h̲	
破擦音	ts	dz	tš	dž							
鼻　音	m	n	ṇ								
流　音	r	ṛ	l								
半母音		w	y								

/s/ は ث，س，ص，/t/ は ت，ط，/z/ は ذ，ز，ظ，ض，/h/ は ح，ه で表記され，いずれを用いて表記するかは，それぞれの語によって伝統的に決まっている．ペルシア語と同様で，アラビア語の借用語も本来の正書法を用いる．

f, q, ’, h̲ は綴字発音 (spelling pronunciation) のみに現われ，普通は f > p, q > k, ’ > ゼロ，h̲ > h となる．

〈表2〉母音音素の表記

	語　頭	語　中	語　末
i) /i/	ا/ي＋	ي	ي
ii) /u/	ا/و＋	و	و
iii) /ē/	اې	ې	ې
iv) /ō/	او	و	و
v) /a/	ا	なし	ه
vi) /ā/	ا	ا	ا
vii) /ə/	なし	なし	ه

そのほか，/q/ は無声口蓋垂破裂音 [q]，/h̲/ は無声咽頭摩擦音，/’/ は声門閉鎖音．

b) 母音音素の表記　母音表記と文字の関係は，表2の通りである．

母音表記を含んだ単語の例をあげる．

i) /i/：ایره irá「灰」，چیرې círi「どこに」

ii) /u/：اوښ uš「ラクダ」，کوچنی kucnáy「小さい」，تالو tālú「口蓋」，لور lur「娘」

iii) /ē/：لېوه lēwá「狼」，ایل ēl「従順な」，شیدې šidē「牛乳」

iv) /ō/：اوبه ōbá「水」，کور kōr「家」，زنګو zangṓ「揺りかご」，لور lōr「鐘」

v) /a/：ارە ará「のこぎり」，هلک halák「少年」，ستړګه stárga「目」

vi) /ā/：آس ās「馬」，کال kāl「1年」，غوا ɣwā「雌牛」

vii) /ə/：زړه zṛə「心臓」，پسه psə「雄羊」，مټ məṭ「握りこぶし」

ただし，/i, u/ は表記されない場合もある．

حکم hukm「命令」

احترام ihtirām「尊敬」

13) 語（屈折語形）は一続きに書き，語と語の間にはスペースを置いて分かち書きする．

دا زما کور دی．

dā zmā kōr dəy.

「これは　私の　家　です」

ただし，動詞の否定辞 nə は，

نلرم nólarəm「私は持っていない」

のように，分かち書きをしない．

また，属格を示す də は，د daal のみで表記する．

د کابل پوهنتون də kābúl pōhantún「カーブル大学」

そのほか，正書法の原則はペルシア語のそれにならう．

14) 疑問符は，؟ で表わす．その他，添加記号や句読点などについては，「ペルシア文字」の項を参照されたい．ペルシア語の場合と同様に，手書きでは，これらの記号は普通書かれない．

15) 数字は，ペルシア文字に同じ．左から右に書かれ読まれる．

۳۰۰ دري سوه drē sáwa「300」

۱۰۰۰ یوزر yaw zər「1000」

۱۳۲ یو سل او دوه برش yaw səl aw dúdērš「132」

[簡単な文章例]

څو بجې دي؟ tsō bajé di?

「何時ですか」

زما سر درد کوي．zmā sar dard kawi.

「(私は) 頭が痛い」

دی دري کلن دئ．day drē kalán dəy.

「彼は3歳です」

زه پښتون یم．zə paštún yəm.

「私はパシュトゥーン人です」

زه پښتنه یم．zə paštána yəm.

「私はパシュトゥーン人（女）です」

څنګه ئې؟ tsənga yē?

「如何ですか」

زه ښه یم zə šə yəm.

「元気です」

د افغان په ننګ می وتړ له توره
ننګیالی د زمانی خوشحال خټک یم

də afγán pə nang mi wótarəla túra nangyālay də zamānḗ xushāl xaṭak yəm.

「アフガン人の名誉のため我は剣を差す．我こそは，ホシュハール・ハタック，時代の名誉を負う者」

(E. Howell & Olaf Caroe, *The Poems of Khushhal Khan Khatak*, Peshawar, 1963 より)

[文字見本]　図1，図2を参照．

[参考文献]

Benawa, A. R. (1958), *Lundaye* (*Anonymous Pushto Couplets*) (Kabul)

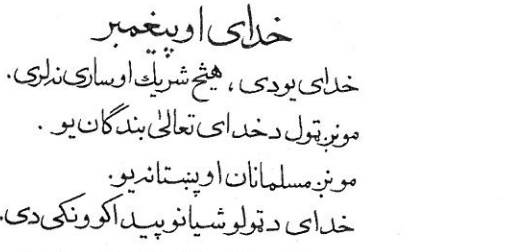
Darmesteter, James (1888-90), *Chants Populaires des Afghans*, 2 vols. (Imprimerie nationale, Paris)

Dorn, Bernhard (1847), *A Chrestomathy of the Pushtu or Afghan Language to which is Subjoined a Glossary in Afghan and English* (St. Petersburg)

Habibi, Abdul Hai (1946, 1960), *A History of Pashtu Literature*, Vol. 1, 2 (Pashto Academy, Kabul)

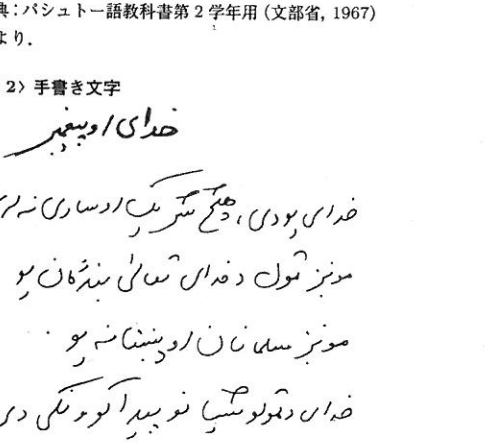
Howell, Evely & Olaf Caroe (1963), *The Poems of Khushhal Khan Khatak* (The Pashto Academy, The University of Peshawar, Peshawar)

〈図1〉『パシュトー語読本』



出典：パシュトー語教科書第2学年用（文部省，1967）より．

〈図2〉手書き文字



注）図1の手書き（アミール・モハッバト元在京アフガニスタン大使による）．

Khaliq, Q. A. (1970), *Fifty Lessons to Learn Pushto* (Peshawar)

Lentz, Wolfgang (1937), “Sammlungen zur afghanischen Literatur- und Zeitgeschichte”, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. Bd. 91, Neue Folge Bd. 16 (Wiesbaden)

MacKenzie, D. N. (1959), “A Standard Pashto”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 22, Part 2 (London)

Penzl, H. (1955), *A Grammar of Pashto* (American Council of Learned Societies, Washington)

[参　照]　ペルシア文字

（縄田　鉄男）

パスパ文字　英 ’Phags-pa script

[名　称]　元の世祖フビライの命によりチベット人僧侶パスパ（’phags-pa）が，チベット文字の楷書体にあたる「有頭字」を基に考案した文字．この文字を公布した至元6（1269）年の詔書中では「蒙古新字」，

『元史』では「蒙古国字」「新国字」と称する．パスパ（パクパ）文字という呼称は，主として19世紀以降のヨーロッパで使われたもので，歴史的に見て必ずしも正当とはいえないが，わが国においては「方形字」「方体字」等の呼称をしのいで定着した感があるため，本項でもこれを採った．なお，「パスパ」は元代西藏音（チベット語音）の漢字音訳である「八思巴」に基づくもので，現代語音は「パクパ」である．

［歴　史］　13世紀の初め頃から，モンゴル人は，ウイグル文字▼を使って蒙古語（モンゴル語）を表記していたが，これに飽き足らぬ元の世祖フビライは，自らが創設した元を世界帝国とするべく，それにふさわしい新文字の製作をパスパに命じた．パスパは，チベット仏教サキャ派本山の総帥である伯父サキャ・パンディタとともに，モンゴル帝国第3代のハーンであるグユクの弟ゴダイに招かれ，1246年に涼州に至った．翌年，ゴダイに灌頂を授けたが，これが，モンゴル人が仏教に帰依した嚆矢であるという．その後，令名を伝え聞いた第4代ハーンの弟フビライがパスパを招き，灌頂を授かった．1260年に，フビライの即位に伴い中原法主に任じられたパスパは，1269年に勅命を奉じると，ただちに新文字を作成し献上，詔勅により新文字が公布された．このとき献上された文字組織そのものは伝わっていないが，『書史会要』『法書考』などの資料によれば，43個の字母からなっていたといい，その後，漢語音や梵語（サンスクリット語）音を表記するための字母が追加されたと考えられる．「…今より以往，凡そ璽書の頒行するものあらば並びに蒙古新字を用い…各々其の国の字をもって之に副しめん」とは，その詔勅の一部である．これ以降，公文書，印章，貨幣，符牌あるいは碑文など，すべて，この新文字によって表記される建て前となった．

しかし，実際にはこの文字は，個々の音を写すのに，旧来のウイグル式の蒙古文字▼に比べてはるかに正確なものではあったが，その反面，煩雑で書きにくかったため，漢人はもとより，モンゴル人の間でもあまり通用せず，一般には旧来の蒙古文字の方がさかんに使用されていた．

たとえば，1289年にイル汗国のハーンであるアルグンがフランス王フィリップ4世に送った書状は，元の分派であり等しくその政令を奉じるハーン国の国書であるにもかかわらず，蒙古文字で記されているし，元においても末期になると勅建碑の銘文すらパスパ文字ではなく，蒙古文字で刻まれるようになるのである．その後，元が滅亡すると，この文字の使用も絶える．1691年にオイラトのガルダン・ハーンがビョートル大帝に宛てて書いた文書に捺されている印璽は，パスパ文字で刻まれているが，これは，モンゴル人による唯一といってよい使用例である．一方，チベットではこの文字の装飾的価値が認められ，hor yig（蒙古の文字）と名づけられて，印章用の文字として現在もなお使われている．

〈語例〉

[1] 　[2]

［文字の性質］　表音節文字で縦書きし，行は左から右に進む．字母の多くは，チベット文字と酷似している．チベット文字や一連のインド系文字▼と同じく，子音文字は母音記号を伴わない場合，必ずaを伴って発音される．たとえば，は単独ではba（蒙古語「そして」）であるが，母音字を伴うとbi（蒙古語「私」）となる．音節の切れ目は，チベット文字のように小点を付して示すのではなく，CVもしくはCVCの基本音節を連書し，次の音節との間に切れ目を置くことによって示す．たとえば，語例[1]は，蒙古語のharan「人」を表わす単語であるが，ha-ranと2つの音節に分けて綴られる．語例[2]は，これに与・位格語尾-aがついた形で蒙古語haran-a「人に」を意味するが，この場合音節の切れ目がha-ra-naと変わり，それに合わせて文字間の切れ目も変わる．

2つ以上の文字を連書する場合，多くは，右端（一部の文字では中央）の線を連ねることによって文字どうしを連結し，ひとまとまりとする．

縦書きし右行する点は蒙古文字と同じであるが，語内の位置に応じて字形を異にすることはない上に，1文字1音価であるから，蒙古語の表記では，蒙古文字よりはるかに正確な表記が可能である．したがって，この文字により蒙古語を表記した資料は，中期蒙古語の貴重な資料と位置づけられている．また，漢語音を音写した資料も，同時期の漢語を知る資料として珍重されている．

また，現に，フビライの意図通り，この文字は蒙古語以外の複数の言語を表記するのにも用いられた．そのため，機械的な「翻字」と表記対象となった言語の音韻体系を考慮した「転写」を区別する必要が生じる．たとえば，（k），（g）の文字は，蒙古語を表記する場合，各々，無声音のkと有声音のgを表わすが，

〈表1〉パスパ文字による翻字と転写

文字	翻字	蒙古語の転写	漢字音の転写
	k	k	g
	g	g	k
	p	p	b
	b	b	p

〈表2〉子音文字表

	パスパ文字	翻字	転写	チベット文字
1		k	k	
2		k‘	k‘	
3		g	g	
4		ŋ	ŋ	
5		q	q	
6		ɣ	ɣ	
7		č	č	
8		č‘	č‘	
9		ǰ	ǰ	
10		ñ	ñ	
11		t	t	
12		t‘	t‘	
13		d	d	
14		n	n	
15		ṭ	ṭ	
16		ṭ‘	ṭ‘	
17		ḍ	ḍ	
18		ṇ	ṇ	
19		p	p	
20		p‘	p‘	
21		b	b	
22		m	m	
23		ts	ts	
24		ts‘	ts‘	
25		dz	dz	
26		w	w	
27		ž	ž	
28		z	z	
29		.	.	
30		y	y	
31		j	j	
32		r	r	
33		l	l	
34		š	š	
35		ẓ	ẓ	
36		s	s	
37		h	h	
38		ɦ	ɦ	
39		hu̯	f	
40		hu̯	f‘	
41		ɦu̯	v	
42		-i̯-		
43		-u̯-		
44		-r-		
45		-m		

漢字音を表記する場合には蒙古語とは逆に，前者が有声音のgを，後者が無声音のkを表わす（表1）．

［文字組織］

1）子音字（表2を参照）　文字の配列順序はパスパの考案にかかるものであるが，基本的にはインド系諸文字と同じである．翻字は，原則的にポッペ（Poppe, 1955）に従い，一部を改めた．

蒙古語のみならず，チベット語，サンスクリット語など各々を正確に表記することが可能な反面，各々の言語の視点から見れば，自らを表記するのに必要なもの以外の字母を含んでいるため，きわめて複雑な文字体系になっている．以下では，蒙古語を表記した形式と漢字音を写した形式を紹介する．斜線の左が翻字，右が転写である．

1～4は，軟口蓋音の系列である．1は無声無気破裂音，2は無声有気破裂音，3は有声（もしくは半有声）破裂音，4は鼻音である．蒙古語のk：gの対立は硬軟の対立であるから，原則として前者は2，後者は3で表記される．ただし，以下の例にも見られるように，蒙古語を表記した形式に限って，硬軟の対立が，蒙古文語をはじめとする他の資料から得られる結果と食い違っている例が散見される．この含意については，さらに検討を要する．なお，漢字音表記では，1は「群母」，2は「渓母」，3は「見母」，4は「疑母」の表記に当てられる（語例[3]～[10]；以下の例で，モ＝蒙古文語形，Skt.＝サンスクリット語）．

5，6は口蓋垂音の系列で，5が硬音，6が軟音に当たるが，蒙古語のqは一部の形式を除き，すべて5で表記される．この両者にはモデルとなったチベット文字はなく，蒙古語を表記するためパスパが考案したもの

〈語例〉

[3] k‘en/k‘en「誰」（モ ken）　[4] ge-rel/gerel「光」（モ gerel）

[5] ka-ru-ti/karuti「ガルーダ鳥」（モ garudi < Skt. garūda）

[6] oŋ-qo-č‘as/oŋqoč‘as「船（pl.）」（モ ongγočas）

[7] kiŋ/giŋ「競」など

[8] gaŋ/kaŋ「岡」など

[9] k‘i/k‘i「起」など　[10] ŋi/ŋi「宜」など

〈語例〉

[11] qo-yar/qoyar「二」(モ qoyar)

[12] pur-ɣan/purɣan「仏」(モ burqan)

[13] ɣij/ɣij「刻」

[14] č'a-q·an/č'aqa·an「白い」(モ čaɣan)

[15] jil/jil「年」(モ jil)

[16] čaw/jav「巣」など

[17] č'u̧aw/č'u̧av「棹」など

[18] jiw/čiv「州」など

[19] ñiw/ñiv「紐」など

[20] t'o-·on/t'o·on「数」(モ toɣan)

[21] d·e-re/de·ere「上に」(モ degere)

[22] ni-k'en/nik'en「1」(モ nigen)

[23] tam/dam「談」など

[24] t'am/t'am「探」など

[25] dam/tam「湛」など

[26] nam/nam「南」など

〈語例〉

[27] be-ye/beye「身体」(モ beye)

[28] meor/mör「道」(モ mör)

[29] su-pur-ɣan/supurɣan「仏塔」(モ suburɣan)

[30] pu̧o/bu̧o「襲」など

[31] p'u̧o/p'u̧o「顔」など

[32] bu̧o/pu̧o「波」など

[33] mu̧o/mu̧o「摩」など

[34] tshi/jï「慈」など

[35] ts'hi/c'ï「此」など

[36] dzhi/cï「資」など

[37] wun/vun「聞」など

[38] dew/tev「鳥」など

[39] žeuŋ/žeuŋ「冗」など

[40] zhiŋ/ziŋ「争」など

と推定される．漢字音表記では 5 は使用されず，6 は「匣母」の表記に当てられる．また，陀羅尼の梵語音表記では，k, kh, g が各々 1, 2, 3 に対応し，gh は 3 と 37 の合体字で音写される（語例 [11] ～ [13]）．

7～10 は硬口蓋音の系列で，7 は無声無気，8 は無声有気，9 は有声（もしくは半有声）の破裂音，10 は鼻音である．蒙古語の č, j は各々 8, 9 で表記される．また，7 は漢字音「床母」，8 は「穿母」，9 は「照母」，10 は「娘母」の表記に当てられる．これらの字母は，梵語音音写には使用されない（語例 [14] ～ [19]）．

11～14 は歯茎音の系列である．11 は無声無気，12 は無声有気，13 は有声（もしくは半有声）の破裂音，14 は鼻音である．蒙古語の t, d は原則として各々 12, 13 で表記される．また，11 は漢字音「定母」，12 は「透母」，13 は「端母」，14 は「泥母」の表記に当てられる．サンスクリット語の音写では t, th, d, n が各々 11, 12, 13, 14 に対応し，dh は 13 と後出 37 の合体字で表記される（語例 [20] ～ [26]）．

15～18 は，サンスクリット語のそり舌音表記専用の文字で，各々，ṭ, ṭh, ḍ, ṇ に当たる．通常の歯茎音表記用の文字を裏返しにする点ではチベット文字と同じである．なお，ḍh は 13 と後出 37 の合体字で表記する．これらの子音文字と連続して表記される母音文字も，左右逆転する．

19～22 は両唇音の系列である．19 は両唇の無声無気，20 は無声有気，21 は有声（もしくは半有声）の破裂音，22 は鼻音である．20 は漢字音「滂母」表記専用の文字で，蒙古語表記に用いられた例はない．なお，19 は漢字音「並母」，21 は「幫母」，22 は「明母」の表記に当てられる（語例 [27] ～ [33]）．

23～25 は硬口蓋音の系列で，23 が一例だけ蒙古語表記に使用されるほかは，もっぱら漢字音，サンスクリット語の表記に当てられる．23 は「従母」，24 は「清母」，25 は「精母」の表記に使用される（語例 [34] ～ [36]）．

26 は，両唇摩擦音 w である．蒙古語表記には使用されず，漢字音の「微母」，および，音節末の -u̧ に当てられる．サンスクリット語では，v がこれにあたる．27 は摩擦音 [ʒ] で，これも漢字音「日母」表記専用の文字，28 も同じく摩擦音 [z] にあたり，蒙古語 zara「月」を唯一の例外として，もっぱら漢字音「邪母」の表記に使用される（語例 [37] ～ [40]）．

29 は，漢字音「影母」の表記に使用されるが，このことから声門閉鎖音であったと推定されている．蒙古語の表記に関しては，一部の語を除き語頭には立たない．蒙古文語形には存在するが現代の諸方言では消失する ɣ/g の位置に，29 は現われる．ɣ/g の消失に伴い，現代の諸方言では，前後の母音が融合して長母音化する．パスパ文字の 29 は，この中間段階を示すものと考えら

〈語例〉

[41] qa̤-·an/qa·an「王」(モ qaɣan)

[42] q·an/qa·an「王」(モ qaɣan)

[43] ė-·ud-č'u/ė·udč'u「建てて」(モ egüdčü)

[44] ·eu-ge/üge「語」(モ üge)

[45] ya-bu-qun/yabuqun「行くものたち」(モ yabuqun)

[46] yin/yin「印」など

[47] jin/jin「引」など

[48] may/may「買」など

れる．

ただし，前後の母音が同一である場合には，V·V と並んで·V という表記も存在する．後者は，サンスクリット語の長母音表記に使用されるものであるから，蒙古語に関しても，長母音の表記を意図したものと推定できる．転写としてはこれらを同じ V·V で転写するやり方と，前者を V·V とし後者を V̄ として区別するやり方がある．

サンスクリット語音写に関しては，29 は 2 種の機能を果たしている．1 つは，長母音の音写であり，いま 1 つは，CCV と CVC を表記上区別する働きである．たとえば，36 と 22 を連書した場合 ꡎ となり，これは sam としか読めないが，これを sma と読ませたい場合には，36–22 の下に 29 を置いて ꡎꡍ とする．これはチベット文字の用法と同じである（語例 [41] ～ [44]）．

30 は [j] で，漢字音表記では「影母」，および，音節末の -i̤ の表記に当てられる．『蒙古字韻』にはこれと酷似した 31 が現われるが，これは「喩母」表記のために，のちに付け加えられた字形である．この時期「影母」は声門閉鎖を伴う [ʔj]，「喩母」はゆるやかな声だての [j] であったが，当時のモンゴル語の y は急激な声だてを伴うものであったので，「喩母」の表記にはこれと異なる文字の必要が感じられ，31 が追加されたと推定される．ちなみに，サンスクリット語 y には，30 が対応し，31 は使用されない（語例 [45] ～ [48]）．

32 は r，33 は l で，漢字音表記では前者は使用されず，後者は「来母」の表記に当てられる．各々，サンスクリット語の r, l に対応する（語例 [49] ～ [51]）．

34, 35 は各々，[ʃ] [ʒ] で，前者は漢字音「禅母」の表記に当てられ，後者は「審母」を表記するために，のちに 34 を変形して付け加えられたものである．サン

〈語例〉

[49] a-ri-·uė/ari·uė「清浄な」(モ ariɣun/ariɣui)

[50] el-deb/eldeb「様々な」(モ eldeb)

[51] lay/lay「来」など

[52] ši-·u-su/ši·usu「食糧」(モ sigüsün)

[53] šaŋ/šaŋ「常」など

[54] ẓaŋ/žaŋ「商」など

[55] seu-me/süme「寺院」(モ süme)

[56] sam/sam「三」など

[57] ha-č'i/hač'i「功徳」(モ ači)

[58] han/han「反」など

[59] fian/fian「飯」など

[60] ts'hi/ts'ï「次」など

[61] hu̧uŋ/fuŋ「風」など

[62] fiu̧uŋ/vuŋ「縫」など

スクリット語音写では，34 はサンスクリット語の ś および ṣ に対応し，後者は使用されない（語例 [52] ～ [54]）．

36 は，[s] である．漢字音表記では「心母」に当てられる．37 は無声の声門摩擦音，38 は有声の声門摩擦音で，37 を変形して作られた漢字音表記専用の文字である．前者は「暁母」，後者は「匣母」表記に当てられる．また，37 は，初頭子音と母音の間に置かれ，中舌化した母音を示す補助記号としても使われる（語例 [55] [56]～[60]）．

39～41 は，すべて漢字音表記専用の文字である．パスパ創案の文字は 39 のみで，これは 37 と 43 の合体字で，「非母」の表記に当てられる．のちに，『蒙古字韻』等では，「敷母」「奉母」表記のために 39 にならって 40, 41 が作られたが，当時の漢語の音韻体系にはそぐわないもので，漢語音韻学の伝統を踏まえた一種の虚構と考えられる．39, 40 は，ともに hu̧ で翻字し，f と f' で転写する．41 は fiu̧ で翻字し，v で転写する（語例 [61] [62]）．

42～45 は，単独では使われない補助記号的な文字である．42 は漢字音の介音 i̤「斉歯韻」，43 は介音 u̧「合歯韻」表記に当てられる．サンスクリット語表記に際

〈表3〉母音文字表

		(a)	(b)	綴字	蒙古語の転写	チベット文字
1		ཨ	–	'	a	ཨ
2	A	ཨཱ	ཨཱ	o	o	ཨོ
	B	ཨཽ	ཨཽ			
3		ཨུ	ཨུ	u	u	ཨུ
4		ཨི	ཨི	e	e	ཨེ
5		ཨྲ	ཨྲ	i	i	ཨི
6	A	ཨོཨོ	ཨོཨོ	'eo	ö	
	B	ཨོཨོ	ཨོཨོ			
7		ཨུཨུ	ཨུ	'eu	ü	
8	A	ཨཻ	ཨཻ	ė	ė	
	B	ཨཻ	ཨཻ			

しては子音結合中の第2要素の表記に使用される．45は，サンスクリット語の anusvara および anunasika の音写に使われる．

2) 母音字（表3を参照）　各々，(a) は語頭形，(b) は語中・語末形である．インド系文字と同じで，子音文字は単独で表記される場合，必ず a を伴うので，a の語中形はない．

1は，ゼロ子音の記号と見なすことも可能であるが，蒙古語表記では，結果的には母音 a を表わす．漢字音の「魚韻」表記に当てられるので，漢語表記の場合は，音韻論的には声門閉鎖に対する「ゆるやかな声だて」を示す子音文字として使用されていることになる（語例 [63]）．

2は o である．A 列 B 列を，音価が異なる別の文字と解する見方もあるが，ここでは前者が開音節末尾，後者は閉音節内で子音が続くときの字形であると考える（語例 [64] [65]）．

3は u，4は e である．ただし，蒙古文語の e に対応するパスパ文字は，この4と後出8の2種類あって，語頭では，ほとんどの場合8の形式しか見当たらない（語例 [66] ～ [68]）．

5は，i である．6は，4と2の合体字，7は4と3の合体字で，A 列は開音節末尾，B 列は閉音節内で子音が後続するときの字形である．なお，例中にも見られる通り，初頭音節以外では，表記上は母音調和が守られず，4が表記されていない場合が少なくない（語例 [69] ～ [73]）．

8は，4より狭い母音 ė を表わすと考えられているが，両者の出現環境はほぼ相補的であるから，音価の相違はあるにせよ異音レベルにおけるものにすぎず，両者は音韻論的には1つの音素と考えられる（語例 [74] [75]）．

〈語例〉

[63] ᠠᠮᠢᠨ amin　'-min/amin「生命」(モ amin)

[64] ᠣᠯᠠᠨ olan　o-lon/olon「多い」(モ olan)

[65] ᠣᠯᠵᠠᠭᠤ oldaqu　ol-da-qu/oldaqu「手に入る」(モ oldaqu)

[66] ᠦᠰᠦᠨ usun　u-sun/usun「水」(モ usun)

[67] ᠡᠯᠳᠡᠪ eldeb　el-deb/eldeb「様々な」(モ eldeb)

[68] ᠡᠨᠡ ene　ė-ne/ėne「これ，この」(モ ene)

[69] ᠢᠪᠡᠭᠡᠴᠢ ibegečʻi　i-heg-čʻi/ihegčʻi「守護者」(モ ibegegči)

[70] ᠥᠷᠭᠡᠨ örgen　'eor-geon/örgön「広い」(モ örgen)

[71] ᠥᠲᠡᠭᠦᠰ ötegüs　'eo-tʻeo-gus/ötögus「老人たち」(モ ötegüs)

[72] ᠦᠴᠦᠭᠡᠨ üčüken　'eu-čʻeu-gen/üčʻügen「小さい」(モ üčüken)

[73] ᠦᠨᠳᠦᠷ ündur　'eun-dur/ündur「高い」(モ ündür)

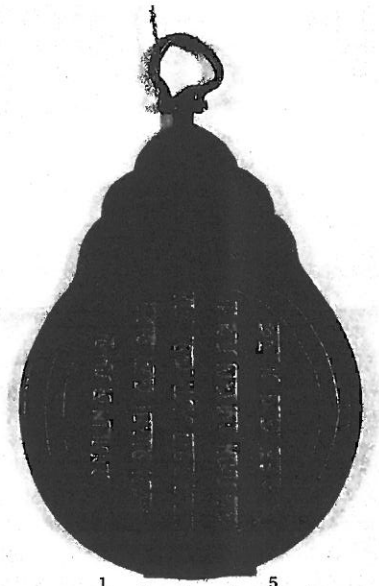
[74] ᠡᠶᠢᠨ eyin　ė-yin/ėyin「このように」(モ eyin)

[75] ᠪᠢᠴᠢᠪᠡ bičibei　bi-čʻi-beė/bičʻibeė「書いた」(モ bičibei)

以上述べたように，この文字は様々な言語を表記し得るよう工夫をこらしてあるが，蒙古語を表記するには不要な要素が少なからず含まれる反面，漢語音の正確な表記には欠かせない声調表記の手段を欠いている．その上，筆画が多く速書きができない．このように，実用性に乏しいため，広く使用されるに至らなかったのも無理からぬところである．ただ，この荘重で装飾性に富んだ字形は，碑文や印章等には恰好のもので，好んで用いられた．漢字▼の篆書（てんしょ）にならい，さらに筆画を増やして装飾性を追求した字形もある．

［代表的資料］　碑文，文書，印章，牌子（パイズ），貨幣などがある．最も数多く残っているのが碑文である．記された文字の数も他を圧して多く，資料的価値が大きい．ほとんどが，パスパ文字と漢字の2体で刻まれている．漢語の伝統的な文語文（いわゆる漢文）とパス

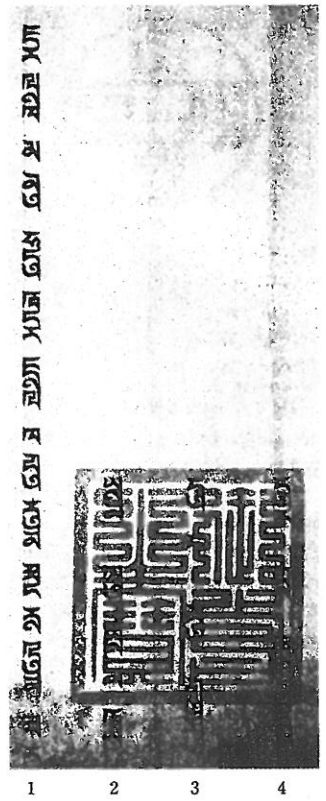
〈図1〉牌子



注）蒙古文のローマ字転写と訳は，以下の通り．1行目の moŋkʻa dėŋri は蒙古文語の möngke tngri にあたる．2行目の kʻučʻun-dur，および，4行目の bušire·esu の u はすべて前舌母音 ü を写しており，蒙古文語の küčün-dür，bisirebesü にあたる．

1. moŋkʻa dėŋri-
永遠なる　天
2. yin kʻučʻun-dur
の　力（の下）に．
3. qa·an-u jarliq kʻen
皇帝の　詔勅．　誰ぞ
4. ėse bušire·esu
信じないならば
5. aldatʻuqayi
罪となれ．

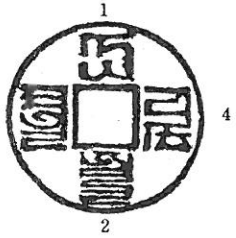
〈図2〉勅令文書



注）勅令文の最後に置かれる定型句．2～3行目にある「大都」は，今日の北京．綴字では tay-du であるが，漢字音を写しているので day-tu と転写した．1行目の tʻeri·un および3～4行目の bukuė-dur の u はすべて前舌母音 ü を写しており，蒙古文語では büküi-dür となる．

1. jarliq manu hüker jil
勅令は（←我らの）　丑(の)年
qabur-un tʻeri·un zara-
春　の　最初の　月
2. yin quč'in-a day-
の　30日に　大
3. tu-da buguė-
都　に　居る
4. dur bič'ibeė
時に　書いた．

〈図 3〉貨幣（漢字音を写した例）



注）縮字と転写を付す．
1. tay/day　大
2. 'ụen/ụen　元
3. t'uŋ/t'uŋ　通
4. baw/paw　宝

パ文字によるその音写を併記したもの（至元 12〔1275〕年の「龍門禹神廟聖旨碑」など）と，蒙古語をパスパ文字で刻み漢語の口語文である白話文を添えたもの（至元 13〔1276〕年の「安西王 Manggala の聖旨碑」など）の 2 種類がある．

文書資料の数は，著しく少ない．史書には『孝経』や『資治通鑑』等の漢籍の蒙古語訳がパスパ文字で印刷された旨の記載があるが，今日には伝わらない．トルファンから出土した Subhāṣitaratnanidhi の蒙古語訳の断片 3 葉が，現存する印刷物の代表的な例である．手書き文書は「海山憲宗王令旨」など十点余が伝わっている．これらのほかに，広い意味で文書資料の一種として，漢字の注音にパスパ文字を利用したものとして『蒙古字韻』と『事林広記百家姓』がある．前者は韻書，後者は児童用の識字書『百家姓』にパスパ文字で注音を施したものである．

トルファン出土のウイグル式蒙古文字で表記された文書には，パスパ文字でウイグル語を記した印が捺されている例が報告されている．

牌子とは，モンゴル帝国の時代に整備された駅通（えきてい）制度で，使者が携えた通行証である（図 1）．

チベットで印章文字として使用されている hor yig は，もっぱらチベット語を表記するためのもので，蒙古語や漢語にしかない音を表記するための字母は使用しない．パスパ文字の篆書に範を採ったものであるが，その篆書化はパスパ文字ほど奔放ではなく，極言するならチベット文字を角張らせて縦書きしたものと見てもよい．

［文字見本］　図 1，図 2，図 3 を参照．

［参考文献］

Poppe, N. N. (1957), *The Mongolian Monuments in ḥp'ags-pa Script* (tr. and ed. by J. R. Krueger, Gottinger Asiatische Forschungen 8, Wiesbaden)

Ligeti, L. (1972), *Monuments en écriture 'phags-pa, Pièces de Chancellerie en transcription chinoise* (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta Ⅲ, Budapest)

Nakano, Miyoko〔中野美代子〕(1971), *A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yün* (Canberra)

中野美代子（1971），『砂漠に埋もれた文字――パスパ文字の話』（塙書房；新版 1994，ちくま学芸文庫，筑摩書房）

照那斯図（1990），『八思巴字和蒙古語文献 Ⅰ 研究文集』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

――――（1991），『八思巴字和蒙古語文献Ⅱ文献汇集』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

［参　照］　東アジアの諸文字

（樋口　康一）

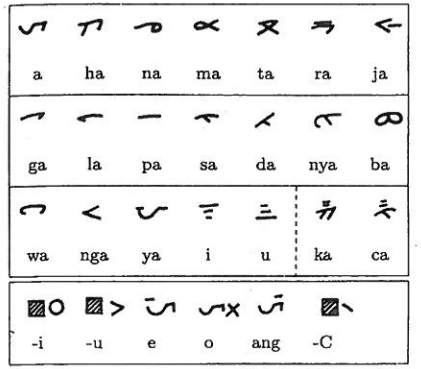
バタク文字　英 Batak script

バタック文字とも．バタク語を表記するために用いられたインド系の音節文字体系（→インド系(の)文字）．バタク語は，インドネシア共和国，北スマトラ州に広く分布する，それぞれが方言分化を示す近縁な諸言語の総称である．バタク文字は，すでに日常的には使用されなくなったが，学校教育の中でわずかに文化史教育の一環として教えられている．

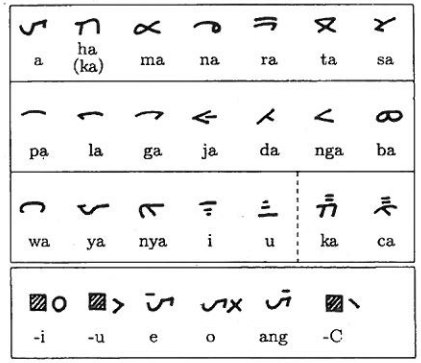
［変種の字体］　バタク文字は，それが表記するバタク語の変種に対応して，南タパヌリ変種（トバ・バタク語アンコラ方言およびマンダイリン方言），トバ変種（トバ・バタク語トバ方言，以下，この方言を「トバ語」と呼ぶ），ダイリ変種（ダイリ語ダイリ方言），シマルグン変種（シマルグン・バタク語），カロ変種（ダイリ語カロ方言，通常「カロ・バタク語」と呼ばれる）などの変種がある．表 1 から表 5 に，これら 5 種の主要な変種の字体を示した（表中の■は，符号をつける字母の位置を示す）．しかし，表 6 に示したように，各変種間の字体の差は小さい．

最も南に分布する南タパヌリ（Tapanuli Selatan）の変種が，最も古いと考えられている．このことは，その南隣に分布するミナンカバウ（Minangkabau）人（ムラユ人の 1 分派）が，バタク文字の創製に何らかの貢献をしたことを推定させる．ミナンカバウ人は，スマトラ島では最も遅くまで，少なくとも 14 世紀末まで，南インドのパッラヴァ朝起源のパッラヴァ（Pallava）文字や，やはりその系統のグランタ（Grantha）文字▼を刻文に使用していた．図 1 の写真は，マラッカ海峡に排水するバルモン（Barumon）川上流の，南タパヌリ県バダン・ラワス（Padang Lawas）地方で発見された碑

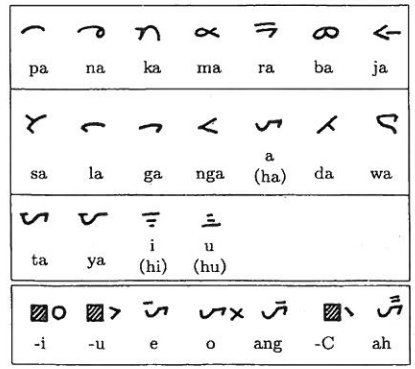
〈表 1〉バタク文字南タパヌリ変種



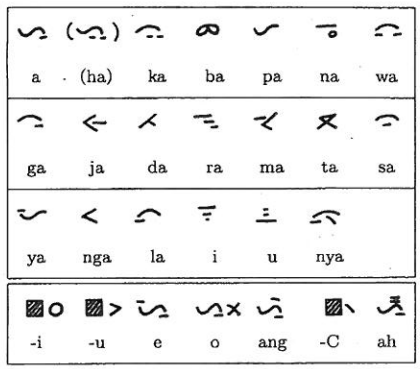
〈表 2〉バタク文字トバ変種



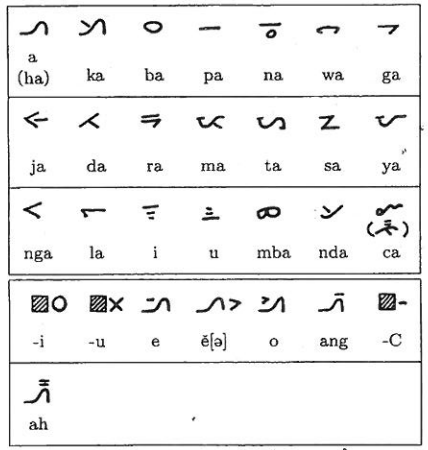
〈表 3〉バタク文字ダイリ変種



〈表 4〉バタク文字シマルグン変種



〈表 5〉バタク文字カロ変種



文の 1 つである．この碑文は，発見地の名をとってバダン・ブジュル（Padang Bujur）碑文と呼ばれている．12～13 世紀のパネ（Pannai, Panai, Pane）王国に由来し，バタク文字の最も古い使用例であると考えられている．パネ王国は，14 世紀には，ジャワ島のマジャパイト王国の支配的影響下に置かれて衰微した．

［文字組織］　バタク文字は，音節文字で，自立的な「字母」と付属的な「符号」とからなる体系である．字母は，内属母音（inherent vowel）/a/ を含んだ音節/Ca/（C は子音）を表記する．内属母音以外の母音は，字母につける符号によって表記する．ただし，母音のみの音節/i/ および/u/ を表記する特別な字母がある．また，符号の一種である，内属母音抹消符号〈᭼〉（トバ語 pangolat）を使って，/C/ のみを表記することがで